

じわじわ進む腕時計の秒針
さっきから五分も経ってない
目線をあげる
信号が変わる、赤、止まる
隣の人と笑う
ひとり俯く
風が吹く
信号が変わる、青、進む

電話をかけようかな、と迷う
いや、もう少し後にしよう
コートのポケットへ手を入れたら
折れ曲がったドニチエコきっぷが出てきた
日付を見ると去年の大晦日

あ、初詣か
3年ぶりの終夜運行
靴下2枚履いて、カイロ背中に貼って
熱田神宮でじりじり境内を進むかんじ
寒かったけど、楽しかったな
真夜中の名城線は
どこかよそよそしく
けれど確かに、新しい年を走った

思うようにならない前髪を
強い風が乱していく
桜はまだだと思いき知らせてくる
君もまだ来ない

待ち合わせをするのが減った
でも一緒に過ごす時間が増える
嬉しいはずなのに、少しだけ寂しい不思議
贅沢な不思議

知らない間に変わっていく
怖いことも素敵なことも
どんどん平気になってしまう
青信号で進む人たちにまぎれて
君から遠ざかってみたくもなる

「ごめん！思ったより遠かった！」

眉を八の字に下げて
照れたように笑いながら走ってくる
面白い顔だな、と私も笑うと
怪訝な顔をしたので更に笑った

この人と
来年も初詣に行けますように
神様もいないところで願ってみる

「…そう言えば駅の名前変わったんだよなあ」
「俺、市役所も好きだったよ、なんかこう渋くてさあ…」
信号が変わる、赤、君の独り言を聞く
ポケットの中のドニチエコきっぷのしわをのばす

風がまた吹く
青く抜ける想い

「桜が咲いたら名古屋城来ようよ、ビール飲んだりしてさ」

私が言う

「気が早いねえ」

君が笑う

信号が変わる、青、じわじわ進む

私ももうすぐ

苗字が変わる



『青の道』を行こうよ」

スイミングスクールからの帰り道、後部座席でチョコレートを頬張る彼はいつもそう言って青のイルミネーションの大通りを通りたがった。

青色ブームの1年生。

クロール25mを泳ぐことを目指している。

「曲がる車線にいたら『お月見団子の道』に行っちゃうから気をつけてね」

大きな交差点で車線変更をしそびれる私に向かって、ひとつ前の交差点から一丁前に予告する。

大通りに交わる広小路通の街路灯は、白いお団子が積まれているみたいな形をしているから『お月見団子の道』と呼ぶ。

泳いでお腹がすいている時に『お月見団子の道』を通るとお腹がグググウ鳴ってしまうから気をつけてね、というわけだ。

うっかり広小路通へ曲がった時は、ふたりでパクパクと食べる真似をした。

ちゃんと『青の道』へ行けたときは、ウキウキするねと喜んだ。

「泳ぐとき、ゴーグルが青色だからってのもあるかもだけど、めちゃくちゃ青い世界なの。

プールの中にもキラキラがあれば25m泳げそうなんだけど、息継ぎが難しいんだよね」

そう言って泳ぐ真似をしているのが気配でわかる。

「この道は何メートルあるのかなあ」

泳いで進むことをイメージしている様子だ。

「ここならどこまでも泳げそうだね」

と言うと

「たしかに」とちょっと嬉しそうにこたえた。

1年生最後の泳力テストの日。

なんとか25mは泳ぐ！と意気込む彼のかわいい背中を見送る。

テストを終え、転げるように走りよってきた彼の手には『48m』と書かれた修了証が握られていた。

「よ、48メートル?!」

どうということかとたずねると、

「25mで壁についてターンしたの！もう後ちょっとで50mだったんだけど惜しかった！」と得意げに言った。

帰り道『青の道』を通った。

「オレ、たぶんあの端っこまで泳げるよ」

彼は「オレ」と言った。

ウキウキした声で「オレ」と言った。

『青の道』を通ると思い出す。

「オレ」を思い出して笑ってしまう。



空を飛ぶ

作：松原 凜

私は大津通りの上空を飛んでいた。

クリスマス前とあって、人の通りがにぎやかだ。

目下には松坂屋の赤い文字と、渋滞で鎖のように連なる車の列。まだ日が暮れるには早い時間帯だが、イルミネーションの青い光が栄の街を照らしこれから迎える夜の準備をはじめたところだ。

今日も忙しくなりそうだと思い、ふと疑問に思う。私はどうして空を飛んでいるのだろう。

「あなた、あなた」

妻の声で目を覚ました。

「もう、またこたつで昼寝して。風邪引いても知らないわよ」

「気をつけるよ」

私は返事をして、そばに転がっている玩具に気づいた。私がたった今まで作っていた、黄色の竹とんぼだ。

クリスマスに何がほしいと孫のタカシに尋ねると、〇〇えもんのタケコプターがほしいと言うので、竹とんぼを作って黄色の絵の具で色をつけてやったのだ。なるほど、それであんな夢を見ていたのか。

再び作業に取りかかると、また臉が重くなってきた。

私はまた、大津通りの上空を飛んでいた。何度試しても同じだった。どういうわけか、この竹とんぼをそばに置いて寝ると、必ず空を飛ぶ夢を見た。そしてこたつで細かい作業をしていると、眠気はいくらでもやってきた。

五度目のうたた寝では、テレビ塔が目前に迫っていた。私は慌てて避けて、テレビ塔の周りをぐるりと一周した。

私は長年タクシー運転手をしており、名古屋の街中を一日に何度も行き来する。夢の中でもやはり、見るのは仕事で見慣れた景色なのだ。しかし仕事とは違い、現実にはできないことも、夢の中なら軽々とできる。

いやはや。これはなかなか楽しいではないか。

そのとき、玄関の戸が開いて、タカシの声がした。

「おじいちゃん、タケコプターできた？」

タカシがそばにやって来て目を光らせた。

「ああ、もうすぐで完成だ。楽しみにしてろよ」

「うん！」

私は孫の頭をグリグリとなでた。

とりあえず、これを渡す前にもう一眠りしておこう。



さっきから着物を着た男二人が地下鉄の入口をじっと眺めている。
「また、新しい門ができましたな」
若い男が言った。
「うむ」
年老いた男は言葉少なだ。
二人とも着物を着ている。おまけに、ちょんまげを結っている。しかし、周りの人々は特に二人に注目しているわけでもない。地下鉄を降りた人々が階段を上ってくる。今日は休日のせい、観光目的と思われる人も大勢いた。
「それにしても、たくさん人がおりますなあ」
若い男がため息とともに言う。
年老いた男が白髪交じりの長い眉をひそめた。
「……これも門であろうか？」
自問するようにつぶやく。
「はっ？ えっ？ 門ではないのでござるか？」
驚いた若い男を年老いた男はじっと見据えた。あごをさする。やがて、長いため息をつく。
「まあ、門であろうな。ならば、我々門番がいなくてはなるまい」
と言った。
「また任務が増えますなあ」
若い男がうんざりしたように言う。
「これ、そのような物言いはしてはならぬぞ。我々は初代城主、義直様から仕える門番。城をお守りするが務め」
年老いた男が若い男を戒めるように言う。若い男は肩をすくめた。
「あっちの門、こっちの門と休む暇もないなあ」
「我々に休む暇など必要なかろう。疲れて死ぬわけでもあるまい。もうとっくに死んでおるのだからな。そろそろあちらの門の交代の時じゃ。参るぞ」
年老いた男はそう言うと、颯爽と歩き始めた。若い男も観念したのか、すぐ後ろを歩き始めた。
そして、文字通り人ごみに消えていった。



「懐かしいな…」

そう感じたのは、改名された名古屋城駅の出入口に初めて立った夏の日のことだった。目の前にはお堀の緑、振り返れば青い屋根の市役所。ここに立つと、ふとそんな気分になる名古屋人は多いかもしれないが、取り分け僕には郷愁に駆られるワケがある。

昭和40年代半ばの幼少期。この辺りに暮らしていた。正確に言えば名古屋城からお堀を挟んだ北、当時、父が勤めていた会社の社宅に。木造の平屋建て、風呂なし。両親と幼い姉と僕の4人家族の住まいだったが、随分とちっぽけで古ぼけていた。

しかし、立地は最高！
なにしろ玄関を出ると、目の前に名古屋城が飛び込んでくるのだから。

僕は毎日、名古屋城を見て育った。
三軒先に住むケンちゃん家へ遊びに行く朝も、裏の公園に紙芝居のおじさんがやってきた昼も、母に手を引かれながら銭湯へ向かう夕暮れも…。
いつもいつも。
金のしゃちほこが凜と立つ名古屋城が目飛び込んできた。

いつのことだったろう。
家の前でケンちゃんと遊んでいると、近所のおばさんにこう言われた。

「ここら辺の子供はみんな名古屋城の子やで。金のしゃちほこみたいに立派になりやあて」

果たして、幼い僕は名古屋城のことをどこまで認識していたのだろうか。
でも、よく理解していなかったとしても
そう言われて、なんだか誇らしい気分だったことを鮮明に覚えている。

小学校に上がる前、父が会社を辞め、家族で祖父母のいる岐阜県へ引っ越した。
あれから半世紀。名古屋城とは随分と疎遠になってしまった。
ケンちゃんとも一度も会っていない…。

昔の思い出に浸りながら名古屋城駅の出入口からお堀に沿って歩くと、
木々の合間から、ようやく名古屋城が姿を現した。
夏の日差しを受け、しゃちほこが金色の光を放つ。

あの頃と、ちっとも変わらない。
名古屋城も。僕も。

「僕は名古屋城の子やなあ」
すっかりおじさんになったけど、名古屋城を見ると、やっぱり誇らしい気分になった。

